早瀬保子編著

『途上国の人口移動とジェンダー』

明石書店，2002年，198p.

本書は，「途上国」，「人口移動」，「ジェンダー」の3つを同時にテーマとして扱い，日本語で書かれた最初の本ではないだろうか．英語では Chant, S. ed. (1992) *Gender and Migration in Developing Countries*. London and New York: Belhaven Press. などが既に刊行され，これら3点の重要性は広く認知されている．日本の研究者が世界の多くの途上国における女性の人口移動に関する研究をおこない，それを誰もが読みやすい本にまとめたことにまずは敬意を払いたい．

本書は，以下の8章より構成されている．第1章「途上国の女性移動者の移動フローと移動率」（早瀬保子），第2章「途上国における女性の年齢別移動率の推移とその特徴」（井上孝），第3章「アジアの女性移動者―インドネシアとフィリピン―」（早瀬保子），第4章「中東・北アフリカの女性移動者―エジプト，モロッコ，チュニジアとトルコ―」（小島宏），第5章「西アフリカの女性移動者―ナイジェリアとガーナの人口移動と女性のエンパワーメント―」（山形辰史），第6章「東部・南部アフリカの女性移動者―ケニアとジンバブエ―」（早瀬保子），第7章「アンデス諸国と中米の女性移動者―ペルー，ボリビア，グアテマラ－」（三澤健宏），第8章「ラテンアメリカにおける女性移動者―コロンビア，ブラジル，ペルー―」（西岡八郎）．

「途上国」，「人口移動」，「ジェンダー」に着目したということで，読者はどのような研究を思い描くであろうか．もし，村に住み込み，そこに暮らす女性の生活や彼女たちの考え方をまとめたようなライフ・ヒストリーを想像するとしたら（上で挙げた Chant 1992はこうした関心にある程度応えてくれる），本書を読んでやや失望するかもしれない．というのも，本書は「人口保健調査（ＤＨＳ）」という国際比較可能な比較的規模の大きなアンケート調査（途上国における15～49歳の女性を基本的に調査対象とする）の統計学的な分析を骨子としているからである．また，所得格差や雇用機会と「人口移動」に関する経済学的なモデル分析，あるいは家族の生存戦略や夫婦関係と「人口移動」に関する社会学的な分析を期待する読者にとっても，読後に物足りなさが残るかもしれない．「途上国」の近年の工業化，観光化などのグローバル化の影響による「人口移動」と「ジェンダー」の変容に関心のある読者にとっても事態は同様だろう．

しかし，早瀬氏をはじめとする本書の執筆者はこうした批判は十分に承知していたのではないか．本書の大きな貢献は「途上国」，「人口移動」，「ジェンダー」に関する本の先鞭をつけたことにあると評者は考える．たしかに読者に不満は残るかもしれないが，今後の研究のたたき台として，本書は大きな意義がある．この点から，もう一度，本書の内容を整理してみよう．上に挙げた問題点の多くは，各執筆者のオリジナルな調査データが示されることがなく，研究が「人口保健調査」に強く依存していることにある．この調査は名前の通り出生などの人口再生産に主な関心のある調査であり，経済学や社会学の特定の関心からおこなわれたものではない．また，時系列分析やパネル分析のための調査設計がなされているわけでもない．しかし，よく読むと，各章での「人口保健調査」の使われ方は異なっており，それぞれの対象地域にふさわしい目の付け所が各執筆者の経験に基づき，実に注意深く，選ばれている．同じデータを使っていても，「人口移動」と「ジェンダー」に関する研究枠組みの作り方は地域によって様々であり，評者は，章ごとにさりげなく工夫された問題設定の妙味に新鮮な驚きを感じた．本書は「途上国」，「人口移動」，「ジェンダー」に関する今後の理論研究，フィールド研究の基礎として，人口学，経済学，社会学など分野を問わずお勧めできる大学院レベルのよくできたテキストである．いずれの章も多くの参考文献が挙げられるなど，読者に親切に書かれていることにも好感がもてる．

（中川聡史／神戸大学）